水牛通信　毎月１回10日発行　1980年６月10日発行　通巻12号　昭和55年５月23日第三種郵便物認可

水牛通信

VOL.2 NO.6
毎月1回・10日発行
定価200円

ビラまき三年カキ八年　鎌田　慧　2
ガリ版の話　菅原克己　5
人にものごとを説明する妙薬　9
ＭＰＰＬ共同コミュニケ'79・6　東京　13
印刷はじぶんの手でやれ　16
楽譜
よねの宣言　23
第三世界の農民にこたえて
安里清信　平野雄三　横山好夫　24
海は人の母である　津野海太郎　27
〈朝鮮語〉の学び方　V
身のまわりのものから　李　銀子　30

ビラまき三年カキ八年

鎌田　慧

鈴木東民のエッセイ集『市長随筆』を読んでいて、こんなところに出会った。

「かれは自分の思想に共鳴する娘さんとふたりで上京し、かなり無理な生活をしていたようであった。しかし元気であった。静かな態度の底に、はげしい情熱をひそめているかれにわたしは強くひきつけられた。かれは自宅でガリ版をきり、それがある枚数に達したとき工場へ届けに来るのであったが、わたしはかれの来るのが待ち遠しくてならなかった。しかし、かれは一年足らずで東京を引きあげてしまった」

苦学生だった鈴木東民は、やがて新聞記者となってドイツに渡り、ナチスを批判して追われ、戦後、読売新聞社の生産管理闘争を指導してクビになる。故郷の釜石に帰って市長になると、この町の「城主」新日鉄と徹底抗戦、やがて労使一体の選挙戦に敗れ、昨年暮、悲憤のうちに世を去った。

そのころ、東民は校正によって糊口をしのいでいた。ここに登場する「かれ」とは、宮沢賢治のことである。本郷の印刷ヤで賢治がガリを切り、それを東民が校正した。「印刷屋のおやじは搾取することしか考えていない。からだをこわしては、元も子もなくなるから、仕事はほどほどにしておけ」。同郷の先輩としての賢治は、東民によくいったとのことである。賢治のヒューマニズムが、ガリバンヤでの苛烈な搾取をくぐり抜けたものであることを、わたしはこの本によって教えられた。

ガリバンヤのオヤジにいじめられる暗い青春について、田宮虎彦は「菊坂」で詳しく書いている。「ガリ書き」(筆耕者とも製版者ともよばれた)は、たいがい、失業者と苦学生と内職主婦によって占められていた。うずたかく紙を積みあげ、昼でもスタンドを灯した狭くて暗いガリバンヤは、本郷から神田にかけて多かった。

五〇年代後半、ナベ底不況期に、男女のガリ書き志願者たちは、神田駿河台の、坂の中腹にある木造二階だての建物に吸いこまれていった。そこには、五人の講師がいて、昼夜二回、失業者たちにガリ書きの技術を教えた。その学校が送りだした卒業生は、五三年から五年ほどのあいだに、一万人にも達した。もちろん、そのすべてが、ガリバンでメシを食えるようになった訳ではなかったが……。

ある日、そのちいさな建物の玄関の両脇になんぼんかの赤旗がたちならんだ。着ぶくれた乗客でふくれあがった中央線は、水道橋をでてまもなく、その旗の列をみながらお茶の水へのカーブを曲った。二階の窓の下に、スローガンが張りだされた。「偽」「装」「閉」「鎖」「反」「対」「！」。講師やタイピストやガリ書きや印刷工たちが組合をつくった。経営者は、倒産、全員解雇でそれに報いた。歩合給だったガリ書きたちの、最初にして最後の組合結成だった。争議は長期化し、やがて「和解」した。

いま、そのちいさな建物は鉄筋コンクリートのビルに姿を変え、若者むきのデザインスクールになった。プロのガリ書きは絶滅した。タイプが主力になり、印刷はオフセットになった。高度成長は職人技術を機械に吸いこんだ。

わたしはガリ版印刷の熟練工だった。一枚の原紙で二、三千枚刷ることができた。一日一万枚刷るくらい軽かったもんさ。それが失業してしまったのである。

「水牛」編集委員会で、ガリ版を発明したのは、かのトーマス・エジソンである、とわたしが主張しても、笑うだけでだれも信用しなかった。わたしは、ガリバン問題のオーソリティなのだが、時代も移ろい、もはや相手にされなくなってしまったのだ。かつて、ガリバン学校の入学案内には、こう書かれていた。

「騰写版は一八八六年頃アメリカの有明な発明王トマス・エヂソンによって発明せられMIMEOGRAPHと命名された。之を我国に輸入したのは堀井新治郎で、同氏は之に工夫改良を加え、騰写版と命名し発表した。時、一八九四(明治二七)年五月のことであった」

ガリバン労働者は賃金の低いことに自嘲はあったが、プライドもあった。

「驚異！　僅か一ヵ月で技術を修得

騰写版程全国的に普及され重宝がられているものはありますまい。農山村、漁村、全国津々浦々に至るまで、凡そ学校、役場の在る所必ず騰写版が利用されています。然し洵に遺憾なことには、大部分の方が基礎的な知識がなく、従って今尚『ガリ版』の汚名の下に朽ち果てようとしています。これでは折角の器械もその使命を充分果し得ず可哀想です」

一軒の印刷ヤのまわりに、なん人かのフリーのガリ書きがいる。仕事がはいってくると、電話で呼びだされる。原稿が朝はいってくれば夕方まで。夕方にはいれば翌朝まで。元競輪選手、元歌手、元銀行員、元サラリーマン、万年大学生。種々雑多なひとたちが、一枚書いていくら、の歩合給で生活していた。

仕事は伝票などの事務用品、パンチカード、企画書、同人雑誌のたぐいなどなんでもあった。活版よりも安くつくることと、活版よりも素早くつくることがガリバンのメリットである。より早く、より安く。そして、活版とおなじようにきれいに。書体は活字に似せて書かれた。活版印刷のイミテーションである。もっとも多く刷ったのは、機関紙やビラだった。印刷は文明の母というなら、ガリバンは革命の母ともいえる。ガリバンのない運動なんて、考えられも

しなかった。

そのころの学生運動の活動家たちに、「ビラまき三年、カキ八年」とか、「ビラ刷り三年、カキ八年」などのいいつたえがあったことにも、運動とガリバンの関係がよく示されている。新入生はビラまき、あるいはスッティング。上級生になってようやくカッティングとなったのである。

いまでも、学生やちいさな団体ではガリバンが使われている。しかし、軽印刷の主流は複写機であり、オフセット印刷であり、それも技術革新がすすんでコンピュータ制御のオフ輪（オフセット輪転機）となっている。タイプ印刷よりも、職人芸のガリバンの方がはるかに安かったことに、労賃の安い時代が投影されている。

タテ、ヨコの溝によってかたちがつくられたガリバン用ヤスリは、鉄筆の使い方を規制した。しかし、その後の軽印刷機械の発達は、シロウトでも自由に絵をいれたり、個性的な字がそのまま通用する多様なビラを産みだすことに貢献した。それはいわば、ジーンズとTシャツなどの普及による表現の多様化とも結びついていよう。というよりは、印刷技術の高級化は、新幹線や特急の発達による鈍行・ローカル線の切り捨ての方にむしろ似ているようだ。つまり、印刷機が高級化されてくると、もっとも安くて手っとりばやいガリバンが衰退し、その分だけ、カネのない、少数者の発言が不自由になってきてはいないだろうか。ガリバン世代のノスタルジアかもしらないが、なにかガリバンの方に、地下生活者のアッピール、といったような、暗い情熱がこめられているような気がしてならない。

今日では、作家は、職工と名くる牛馬があって、一日二三志位を遣つて置けば、其著書の印刷を任すことが出来ると思つて居るので、印刷所が如何な風な所だかを知らうともせぬのである。植字工が鉛毒に羅って苦まうが、器械の番して居る小僧が貧血で死なうが、其代りになる貧乏な奴等があるではない乎と言たやうな訳だ。（中略）

人が単純な手の仕事を、劣等なことのやうに考へる限りは、作家が自ら其著書を活字に組むなどいへば、驚くべきことのやうに見えるであらう、運動にするなら体操場もあれば競技もあるぢやない乎など、いふ。而も手仕事が最早恥辱でも何でも無くなつた日には、総ての人が手仕事をせねばならぬこと、なつた日には、別に彼等の為めにやる人が極つてもないので、作家の愛読者は固より、作家自身も、直ぐに植字架や、活字を扱ふ術を習ひ覚えるであらう、而して彼等は倶々に――印刷すべき書物の愛読者一同が――活字を拾ひ、ページに組上げ、印刷器械から刷立のホヤ〳〵を取つて見る楽しみを解するであらう。斯る美はしき器械も、今は朝から夜まで其を扱ふ小僧に取ては虐待の道具であるが、而も其最負の作者の思想に音声を発せしめんが為めに使用する人々には、実に娯楽の源泉となるのであらう。

クロポトキン著『麵麭の略取』（一八九二年）より
幸徳秋水訳

ガリ版の話

菅原克己

ガリ版というのは若いときの記憶とむすびついていて、どこかロマンチックな気がします。ぼくがものごころついたころは、ガリ版はもう一般的になってたけど、いつごろから使われはじめたのかな。ちょっと調べてみましょうか（と百科事典をめくる）、ホホウ、日本では一八九四年に堀井新治郎が考案――とあります。あんがい古いんだね。でも一般的になったのは大正からですね。

ぼくが師範学校のころにだした同人誌も、もちろんガリ版でした。本気で勉強しはじめたのは、昭和8年に共産党軍事部の「兵士の友」という機関紙のプリンターをやったときからです。この新聞はその前の年に創刊されて、はじめのうちは活版だったんですよ。

軍艦山城の乗組員が
艦内細胞をつくる。
その機関紙は「そびえるマスト」
ぼくはその記事を切った。
場所は高円寺。
ぼくは手製の騰写版で
それを刷った。
絶対に音のしない自慢の機械。
ぼくは手伝いの娘に威張ったものだ。
「ごらん、
軍艦の細胞だ。
日本ではじめてだ。
そしてこのガリ版は
カンバスの枠で、
このぼくが作ったんだ」と。

できあいの騰写版は重いし、かさばるからね。それで自分でつくったんです。その数年前に、戦旗社から「大衆の友」という雑誌がでていて、「騰写版のつくりかた」というような記事がのってた。それをおぼえてて、あとは自分で工夫した。

かんたんなんですよ。だれだってできる。図でかいてみましょうか。

カンバスの枠でつくるのね。上の枠Aにはミゾを掘って、そこをロウで埋める。ミゾを掘るのは、あれはなんていうのかな、大工さんがもってる三角のミゾをつける道具をつかうといい。下の枠Bは内側をすこし削って、ガラス板をはめこむ。そしてAとBとが蝶つがいみたいにつながるところ――そこに釘をうって、輪ゴムかなにかをギリギリまきつける。これでできあがりです。

この手製の道具がいいのは、まず、金具をつかっていないから、音がしないこと。それから、もちはこびに便利なこと。カンバスの枠だから、すぐバラバラにできるでしょう。ぼくはそれを絵具箱に入れて、もちあるいていました。自転車でね。

印刷するときは、上の枠Aのうえに原紙を

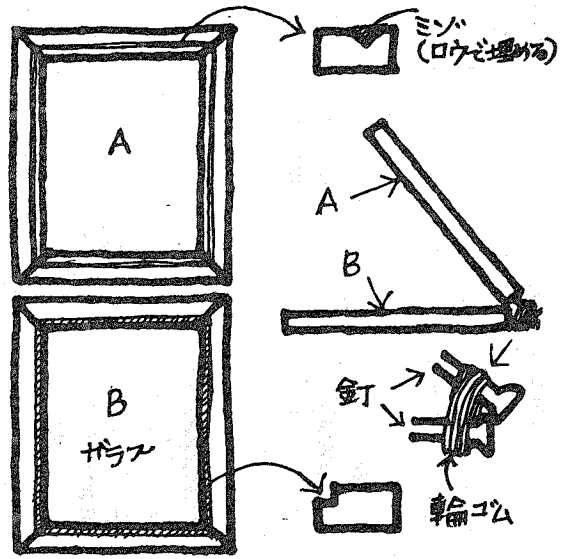
おいて、パレット・ナイフをローソクの火であぶって、それでこするんです。三角のミゾにつめておいたロウがとけて、すぐ固定できる。枠には絹の布なんか張っていないから、もちろんジカ刷りです。なれてくれば、それで一〇〇〇枚は刷れます。それと、このやりかただと原紙にシワがよらない。これも長所のひとつですね。

ローラーは買ってくる。たしか細川製版といったと思うけど、東京でも有名な器械店があって、そこで原紙や謄写インキといっしょに買いました。

そのころ、上部との連絡を担当していた女性がいてね、彼女が、日本一のプリンターに会わせてやるといって、水道橋あたりのゴミゴミしたとこの二階に、ぼくをひっぱっていったことがあります。むさくるしいドテラの男がいて、見ると、脱脂綿を口にふくんでる。そうしないと、ガリ切りのとき、朝から晩まで歯をくいしばっているんで、歯がガタガタになってしまうというんだな。この人におそわったのは、ヤスリは古物の方がいいということ。新しいのはやわなんです。おそわったとおり、大塚の古道具屋で中古のヤスリを手に入れました。固くて、いいものでした。

これらの道具は、昭和9年の春、ぼくが非合法時代の「赤旗」の最後のプリンターになってからも、つかいつづけました。高円寺の部屋をおいたてられて、仕方なく、自分の家の三畳間を仕事場にしました。当時、ぼくは二十三歳でした。

見給え、
ここに



一七三号から
終刊号までの
「赤旗」がある。
これは僕とちい公と呼ぶ娘が
プリントしたものだ。
プリント・ビューローは
練馬南一丁目の、わが家。
そして一切の、
僕の、光の、存在理由は

ここにあるのだ。

エエト、「赤旗」の創刊は昭和3年、一九二八年です。「アカハタ」ではなく、「セッキ」といっていた。

創刊のときも、やはりガリ版でしたね。合法的な「無産者新聞」の方は、いちおう活版でしたけどね。「赤旗」は党員のあいだだけで秘密に配布されていて、新聞ではなく、うすいリーフレット形式のものだった。はじめて友人にチラッと見せられたときは、感動しました。なんか、崇高な感じだったな。和紙でね、そこに柳瀬正夢がかいたという題字だけが、赤刷りになってたんです。

ほんとうに和紙だったんですよ。和紙はやわらかくて丈夫だから、クシャクシャにまるめて、靴下のとこにつっこんでおいても、一平気なんです。国際的にも有名だったらしい。非合法時代のロシア共産党も、重要な指令には和紙をつかった、やはりガリ刷りでね。そういう話を聞いたことがあります。

その「赤旗」が、大衆化の必要があるということで、昭和7年から活版になり、またガリ版になった。ぼくがかかわったのは、昭和9年3月8日号から、翌10年2月20日の一八七号まで。これが終刊号になりました。

スパイ。
プロヴォカートル。
「多数派」。
街頭検索隊、
不審訊問、
テロル。
——それら敵たちが
気づかぬところで、
ひそかに
僕の、青年は、
わが方の新聞つくり。

(昨日のように光る空。
木の葉の揺れ。
人をはばかるひそかなささやき。
静かなカッティングの音)

ぼくがつくった「赤旗」は、ぜんぶで十五号。それと号外が何号か。半月刊ということだったんだけど、不定期でしたね。タブロイド版で4ページ。発行部数は五〇〇部。闘争経験もあまりなく、もちろん党籍もない。そんな青年が、昭和10年に検挙されるまで、自分の部屋でそんな仕事をしていたのだから、考えてみれば、ふしぎな話ですよ。

オット、いま思いだした。ぼくがはじめてプリンターをやったのは、「兵士の友」ではなく、昭和6年かな、「全協・日本一般使用人組合」の機関紙です。日本教育労働者組合が「一般」に合併された直後の時期で、教育者労組のリーダーをしていた友人にひっぱりこまれた。「字がうまい者がガリ切りをやると、字がへたになる。へたな者がやると、うまくなる。お前は字がへただから、プリンターをやれ。一挙両得だぜ」と、うまくすすめられてね。だから正式に勉強したわけではなく、独学です。線をひくときは、できるだけ粗いヤスリをつかって、太い鉄筆で切れば、なかなか破れない。カットのぼかしは、原紙を紙ヤスリの上において、指の腹でこする。そういうことも、だんだん自分でおぼえていった。器械も自分でつくれるし、だれでも工夫しだいで、必要な技術を身につけることができる。それがガリ版のいいところでしょう。

こういったわけで、ぼくなんかの青春はガリ版の記憶とかたくむすびついているのですが、さて、ちかごろの若い人たちのばあいはどうですか。

人にものごとを説明する妙薬

近年、印刷物がおびただしい量になっていると言われる。そのなかで、自分の苦労してつくった書き物を人の手に渡し、読んでもらい、反応を得るのは、至難の技である。しかし、やはり書くことの目的はそこにある。では……

テーマは、こと印刷に関するものであるが、印刷そのものでなく、いかにして原稿を印刷所に持ちこむか、すなわち、われわれは何をどのように書けば、考えを普及できるか、そのひとつの方法論である。言うも愚かながら、これは実際に、目をみはる成果を挙げた一冊の書物、つまり、筆者のみならず右寄りの人も左寄りの人もふくめて、多数の人びとが感嘆の声をもらした、例の「緑の会」の編集せる「原子力発電とはなにか・・・そのわかりやすい説明」が作られるまでを楽しく解析した、そのわかりやすい説明、である。

物を書くときの参考にしていただければ、幸いである。

まず、あの本を書評して色川大吉氏いわく、「読むというより、見る、見るというより考えこませる、まことに怖ろしいゾクゾクする本である。今までの常識を破った縦横無尽な造本にまずびっくりし、読む、見るうちに、体の中からカアーッと熱いものが湧いてくるような内容にたじろいでいる。これはなんとすばらしい教本だろう。」

さて、この書評からおわかりの通り、この本は、かなりの部分を絵で解説している。その一例を縮小して示すが、この縮小にはかなりの抵抗を感ずる。というのは、同書の特長のひとつに、文字が大きく、きわめて読みやすいことが挙げられるからである。

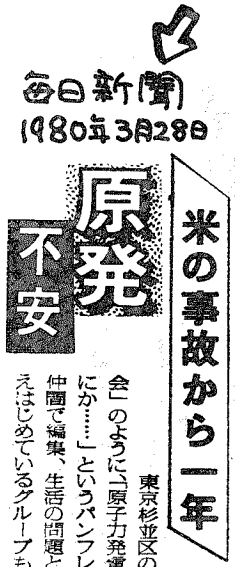
このサンプルを見て、みなさんは何をお感じになっただろう。

私は、こう思う。

まず何よりも、印刷物は読み手の立場から書かれなければならないこと。同書の出発点が、「人々に理解されたい」という大変な熱意に裏打ちされ、一字一句に読み手の心理が反映されていることである。この本は、原子力の危険性を訴え、同時に、だれもが知りたいエネルギー問題の解決法を、おどろくべき事実によって次から次へと明快にひもといている。しかも、多年にわたる新聞記事のスクラップによってそれらが実証され、あらゆる書物から証言が引用されているため、われわれに強烈な確信をいだかせてくれる。

つまり、引用されている事実は、読み手がそのまま物的証拠として利用できるものばかりである。

おそらくこの編集者は、わが子の寝顔をながめながら、その将来を案じつつ、ただ叫ぶことの無為を悟り、人を納得させるために生活との接点を追い求め、毎日毎夜さがし続け、豊富な証拠の一大コレクションを、集大成したのであろう。(この文意も、その編集者であれば、つぎのように実証するのではなかろうか。)


毎日新聞
1980年3月28日
米の事故から一年
原発不安
東京杉並区の「緑の会」のように「原子力発電とはなにか……」というパンフレットを仲間で編集、生活の問題として考えはじめているグループもある。

というわけで、この編集者は、すでに自己の頭脳のなかで確立された論理に、「絵」と「新聞記事」と「証言」を配置して、本を完成させている。それは、すべて読み手のために……

では次に、読み手のために同書が頭を使っている点は、ほかにどのようなことが挙げられるか、それを手探りしてみよう。

第一に、あの大きな文字と絵でスペースをとられながら、わずか一四〇ページの紙面で、原子力について誰もが口にし、新聞が書き、推進派が主張する論理を、ほぼ説明しつくし、疑問点に答えている。したがって、買い手はわずか四〇〇円で、原子力のクロウトになれるから、得をした気分になる。この利害関係は、きわめて貴重ではなかろうか。運動家はとかく、カンパのやりとりで自滅しがちであるが、そもそも読んで欲しい相手はブルジョワ人であり、彼らに読んでもらってはじめて真の社会運動の大きな力が生まれることを考えるなら、百万遍のアジ演説や訴えより、密度の濃い内容を、安い値段で印刷・普及した方が早道である。

これを逆に見ると、同書では、だれもが直感で分ってしまう点については、ほとんど説明を省略してある。たとえば、地震と大事故の関係について、マグニチュードいくつであれば危険だというような水かけ論的なことがらは、一切述べられてない。地震があれば危い、という否定しがたい結論から出発してしまい、どの程度危いかが、さまざまの新鮮な事実によって説明されている。

第二に、編集者は正直である。決して資本主義の論理を否定していないし、原発推進者の考えを無視していない。無視していないどころか、それを最大の努力を払ってわかろうとし、そして、この原

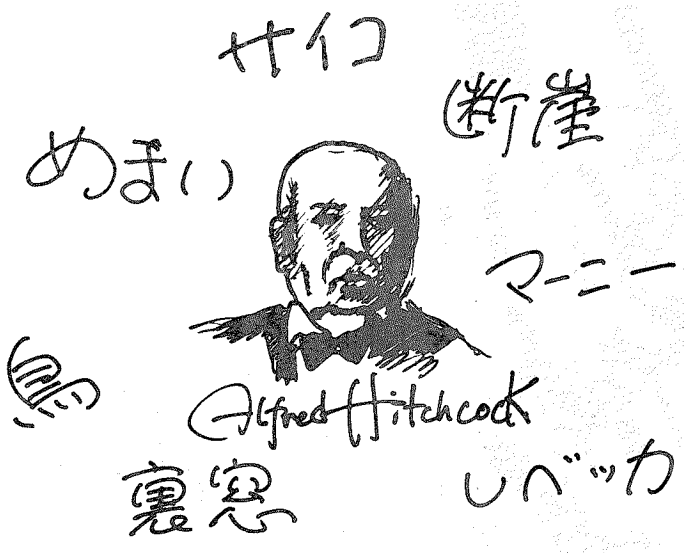
子力推進一点ばりの現状がどうして生まれてしまったか、あるいは彼らがなぜ嘘をつかなければならないかについて、その答が示されている。結局、同書の手法は、まず原子力に反対する自分の思考を否定するところに出発点を置いているから、このような推進者の気持がわかり、最後に彼らのあやまちを解説し得たのであろう。

第三に、言葉がなじみやすい。これまでの書物では「体内被曝」とか「体外被曝」といった用語が頻繁に使われ、ただでさえ重苦しいテーマであったので、読み手をこれでますます疲れさせてしまう例が多かったのに比べ、さきほどのサンプルでお分りの通り、同書では「体のなかにある」とか「外にある」だけですませている。

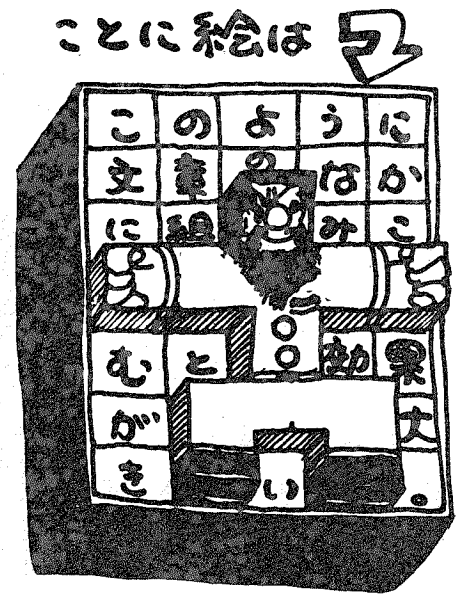
なるほど、ガリ版ずりで身近な人にだけ読んでもらう場合はともかく、印刷所に頼んで本や小冊子を作ろうとするなら、それは不特定多数を相手に、ものごとを説明したい。とすれば、子供にでも分るように書くことが原則なのかも知れない。つまり、子供は六歳ぐらいで完璧な知性を備えているからである。

第四に、書名が適切である。「原子力」と聞けば、まず大方の人はわかりにくいものと決めつけているから、「わかりやすい説明」とあれば買う気が起こる。が、これはこのテーマにふさわしい書名であって、ほかのテーマには、やはりほかの書名がよいだろう。ヒッチコック監督は、短くて覚えやすい映画のタイトルを好んだが、それもひとつの方法である。運動家のテーマは、そもそもが重いので、書名には相当の魅力を備える必要があろう。

そして最後に、ユーモアと皮肉、これを添えられれば、印刷物は広く読み手をつかむことができるだろう。



以上まとめると、印刷所に原稿を持ちこむチェックポイントは
内容が濃い（人の知らない驚きが書かれている）
自分が買う値段をつけてある
一冊に、ひとつのテーマの全体像が盛りこまれている
資料で実証してある（相手側の資料を豊富に使うと効果大）
自己否定から論理を出発させている
言葉がかみくだかれている（絵も活用したい）
魅力的な書名である
なんといっても、読み物として面白い
といったことになろうか。



さて、最後の種明しであるが、この文章は、水牛編集室が書いたのではない。なんと、「原子力発電とはなにか・・・そのわかりやすい説明」の書き手その人が、この筆者であり、編集室には了解を得て、このようにした。というのも、書き物を読んでもらうひとつの方便として、この文章全体をひとつのサンプルとして示したかったからである。

はてさて著者がこのように自画自賛するとは、大変勇気のいることである。いま思うに、これは同書の大宣伝であり、「水牛」の読者諸子にウィットあるなら、必ずや西荻窪ほんやら洞（電話三三一一〇四六九）へ走ってその本を買い、遠くにあるなら、「緑の会」（〒一六七東京都杉並区荻窪郵便局私書箱三八号、電話〇三-三九〇-四四八八）へ、とるものもとりあえず注文されるのではなかろうか。

（みどりのかい）

MPPL共同コミュニケ ’79・6 東京

私たちがメディアプレス市民工房をはじめて一年半ほどがたちました。この一年半の間に、多くのグループ、個人がメディアプレス市民工房を訪ねてきました。

そこで私たちは、この一年半の経験と成果と反省を踏まえ、私たちがメディアプレス市民工房を作った経過や意味、私たちが目的としている事などを、これまで私たちと関係をつくってきたグループや個人に対し明らかにしようと思います。

メディアプレス市民工房は「印刷所」です。

しかし、一般の印刷所とはかなり性格を異にする「印刷所」です。

現在、このメディアプレス市民工房を、三十五歳から二十一歳までの男女八人で運営しています。メンバーは今でも徐々に増えています。メンバーのほとんどは、それぞれ自分の仕事や活動を別に持っています。したがってメディアプレス市民工房の活動は、夕方から夜にかけてが多くなります。

この様な私たちの結びつきは、ベトナム反戦運動や全共闘運動、ロッキード疑獄を追及した『週刊ピーナツ』などの活動の中から生まれてきました。

私たちがメディアプレス市民工房を作ろうと考えたのは、こうした様々な運動や活動の中で、自分たちの表現や主張であるビラ・ミニコミなどが「原稿を書く」という段階で終っていて、あとは印刷屋さんにまかせてしまうということに疑問を感じたからでした。一つの仕事を分断し、専門化してしまうことによって、様々な矛盾が印刷屋さんや自分たちの中に起ってきてしまう。そうだとしたら、できるだけ印刷のできあがる最終の段階まで自分たちの手でやってみよう。そうした思いがメディアプレス市民工房のスタートでした。

現在私たちは、メディアプレス市民工房を続けていくにあたって、幾つかの目的を持っています。

私たち印刷する側と、印刷の注文者との関係では、注文者が、自分たちでできることは最大限努力して自分たちでやってもらう。つまり、原稿を書いて、注文したらそれで終り、あとは印刷物ができ上ってくるのを待つだけというのではなく、原稿を書いたらレイアウトをし、版下づくりもする、そして、印刷をするまでに必要な工程を知り、最後の印刷も私たちと一緒にやる、というようになって欲しいわけです。

この一年半、こうした作業は、私たちの印刷所の空間的狭さや、印刷のための時間的制約などがわざわいして、なかなか私たちの理想とする形には進んでいません。しかし私たちは、印刷する側と注文者との関係を単なる印刷屋さんと注文者の関係から、自分たちの表現や主張を協力し共同でつくっていく関係へと転換したいのです。したがって、私たちの方も、注文者の行なっている運動や活動の意味をできうる限り了解し、最優先で印刷をするようにしています。

私たちメディアプレス市民工房を構成するメンバーの中で追求していこうと考えている課題はいくつかあります。

そのまず第一は、運動の中における技術の位置の問題です。これは、思想と技術、あるいは、政治思想と技術思想の問題へと進展していくべき課題としてあります。この問題は今後「私たちの方法」という形で内容を展開していくつもりです。

第二の問題は、私たちメンバーの中で、どのような共同性をつくっていくのか。つくりえていくのかという問題です。一つのグループが形成されると、その中で必ずといっていいほど抑圧する者と抑圧される者ができてしまいます。このことは一つの仕事を能率だけを目的にして分業していったりすることの中にも存在しています。私たちは、こうした問題点を、共同して作業を進めていく中で克服していくことを目指しています。

こうしたいくつかの実験の場としてメディアプレス市民工房をつくりました。私たちに印刷の注文を発注する時、私たちの以上の目的について考えてみてください。そして、私たちとの関係を新しく創り上げていきましょう。

《メディアプレス市民工房一同》

御案内

……はじめに……

事務所には常に人が居る訳ではありません。おいでになる方は、必ず電話でお確かめ下さい。平日ですと夕方七時半頃から十一時頃までに御連絡下さい。

メディアプレス市民工房（略称ＭＰＰＬ）
新宿区荒木町３　駒ビル302
☎３５５－５０６５

……どんなものが印刷できるか……

現在使っているのは「軽オフ」と呼ばれるプリントショップ等で使っている小さな印刷機ですので印刷できるものには限度があります。

使う紙は上質紙が中心になります。色上質紙・中質紙・孔版紙等も可能ですが紙代が割高になります。コート紙・アート紙のように表面がなめらかな紙は無理です。

大きさはＢ４までです（詳しく言うと、紙の大きさは、295mm×379mm、印刷できる大きさは、240mm×330mmまでです）。また、紙の端までは印刷できません（普通は10mm以上あける）。ただし、この大きさまでなら、例えばＢ５のチラシをつくるのにＢ４の紙に二枚分を一度に印刷して後から切るということもできます。葉書を印刷するときも、官製葉書は印刷し難いので、一枚の紙に四枚分印刷して、後で切りそろえて私製葉書にしています。

原稿は原則としてそのまま印刷できる〝版下〟にしてきて下さい。手書き・タイプ・写植等どのような方法でも結構ですが、白黒のはっきりしたものを作って下さい。その際に、極端に太い字や大きなベタ（連続してインクがつく部分）はきれいに印刷できないので注意して下さい。拡大・縮小・写真・タイトルの写植等については御相談下さい。

印刷する色は黒が普通ですが、色刷りも可能です。ただし、二色以上になるとその色数だけ印刷機に通すので位置が合わなくなります。現在用意してある色は赤・藍・草・黄・紫等ですが、指定の色を作ることもできます。

……その他にお手伝いできること……

パンフレット・チラシ等で折りが必要でしたら二つ折りのできる折り機があります。製本は数が少なければお手伝いできます（場所が狭いので多くなると無理です）。発送作業の方法・あて名カードやラベルの作り方等も御相談下さい。

使用機材一覧

東航オフセット810　同電子製版機Ｂ45Ｌ　ＰＳ版焼付機
モリサワ写植機ＭＤＢ　断截機　折り機

■定期購読のお願い■
日本の文化状況に鋭く切りこみ、第三世界の文化情報をコンパクトに紹介する『週刊ポストカード』を毎週確実にお届けします。
１年間(50週分)＝３千円。御送金には郵便振替（東京５－104527）が便利です。

週刊ポストカード
©日本アジア・アフリカ作家会議
東京都新宿区高田馬場２－７－１１
コーポ高田306号　☎03(200)3138
WEEKLY POSTCARD
from Japan Afro-Asian Writers' Association

印刷はじぶんの手でやれ

橋本　メディアプレス市民工房をはじめたのは77年ですね。76年から1年近く「週刊ピーナツ」をやりまして、それを縮小して、第2次ピーナツをだすことになった。そのときどういう方法で印刷しようかと話しあってるうちに、軽オフの機械を借りられることになって、それではじめたわけです。第2次のピーナツが終って、このまま解散しちゃうのはもったいない、せっかく印刷の技術も少し身につけたのだし、なにかいかす方法はないか、とはじめたのがメディアプレスなんですね。

津野　それ以前には印刷の経験はなかったんですか。

橋本　ええ、謄写版程度ですね。ただ私は前から版下や製版の仕事をやっていたので、それらに関してはある程度知識があったんですけど、印刷は本を読んで知っているだけで、実際に機械をいじったことはなかった。

津野　そういうふうにスタートして、今は自立した会社というかたちで？

橋本　いえ、会社というのではなくて、何か印刷したいとき自分で印刷できる手段を保持しておこうということなんです。そのためには印刷機械と場所を確保しなくちゃいけない、確保するためにはいくらか金をかせがなくちゃいけない。そのためにある程度印刷の仕事をひきうけてやっていたわけです。ほとんどが運動関係の仕事で、それを市価よりかなり安い値段でやっていた。こういう趣旨ですから、給料はなし。当然ほかに仕事をもっているひとがあつまっているわけですね。仕事が終ったあと来て夜中にシコシコとやっている。家賃と消耗品がでればいいので、経済的にも、十分なりたってました。

津野　何人ぐらいかかわってるんですか。

橋本　長いこと4、5人でやってたんですけど、実際に動けるのは3人ぐらいですね。そのうちのひとりが大学を卒業して就職して、そこが遠くてね、しょっちゅう来るのがむずかしくなった。それで、これまでのように仕事をひきうけるのは当分お休みにして、自分で印刷をやりたい人を対称にして、我々はそのお手伝いをするということにしたんです。

津野　やりたい人には技術的なことを教える……。

橋本　はい。まあ、これがのってワンサカとこられたらちょっとこまりますけど。

津野　実際にやってみた人はいますか。

橋本　あんまりたくさんはいないんですよね。こちらがよびかけても、まあ話としてはわかるけどやるヒマがないというのが多いですね。少数ながらやってみたひとは、そうひどく大変なものではないなという感じになってきてるようです。

津野　トライプリントの場合は？

青山　株式会社として設立されたのが78年8月で10月から実際にスタートしました。自主講座の分室というのが文京区白山にあったんですが、その年の秋に出なきゃいけないことになって新しい場所をさがしてたんですよね。ちょうど今トライプリントのある向丘のビルが見つかって、4階だてだしただ事務所として使うには大きすぎる、じゃあ下で商売やったらいいんじゃないかってはなしがでてね。そのころ就職あぶれ組だったぼくらがやろうということになった。それが78年6月で8月にはもう会社ができちゃったわけです。

なぜ印刷会社をえらんだかっていうと、ぼくらがそれまで運動のなかでかなり印刷物をつくってたってことがある。自主講座では講座をやった関係で毎週講義録をつくったし、月刊誌も出してたし、出版・印刷は身近なものとしてあったってことと、印刷屋をやってる安川さんという人がいて、自主講座の印刷物をぜんぶひきうけるだけじゃなく若い人たちに印刷のやり方もおしえてたんですね。自主講座の運動のなかでの印刷物の蓄積と安川さんの蓄積とがあったから、印刷屋だったらなんとかなるだろうという判断があった。スタートしたときは4人で、印刷屋としてはみんな素人同然なんですよね。ぼくなんか反公害輸出通報センターがもってる小さい卓上型の印刷機を動かしたことはあるけれども、印刷上の知識も技術もほとんどなくて、しかも資金的にもアテがなくて、まったくゼロからのスタートでした。

津野　今は？

青山　現在は6人でやってます。印刷機はB4の機械なので、かなり限定されたものしかすれないから、まだまだ零細ですよね。最初はやはり運動体関係のものがほとんどだったんだけど、最近は名刺とかはがき、それに町内の印刷物もかなりやってますよ。それからぼくらが公害企業として糾弾している企業から下請の下請で仕事がまわってくることもある。そういうところからもっともっと金をとれるといいんですけどね。

津野　一番あたらしいのが軽気球舎……。

新井　日本アジアアフリカ作家会議の事務局の一郭に写植機をいれたのは去年の8月ですけど、会社としてやりはじめたのはことしになってから。ぼくもやっぱり大学を途中で出て、食っていくために写植屋に勤めたんです。そしたら友だちから写植機を安く買えることになった。さてどこでやろうと思ったら、ときどき顔を出してた

ＡＡ作家会議の事務所でやれっていわれて。

津野　？

新井　週刊ポストカードというミニコミを出していて、写植を外注すると経済的にしんどいんでそれをタダで打つってことです。そのかわり家賃は出さない。

津野　すると今の仕事はだいたいＡＡ作家会議のものですか。

新井　そうですね。あとは早稲田大学が近いから同人誌なんかよく来ますよ。それを写植だけじゃなくて印刷までうけおいます。

津野　何人でやってるんですか？

新井　専従がふたりで、もうひとり手伝ってくれるひとがいる。

青山　それで一応食べてはいけるわけ？

新井　ぎりぎりだけどね。

津野　共通していえるのは、運動の中でどうしても印刷物が必要になり、それをいちいち外注していては時間的にも経済的にも成りたたない。そこで運動の内部で技術や道具を手に入れることからはじまって、少しずつ充実していくプロセスがありますね。それとメディアプレスの場合にあきらかだけど、印刷は特殊な技術ではなくて、だれにでもできるものだというふうに、大勢の人にひろげていくというところがある。

橋本　そうですね。以前は使いこなせるまでに何年もかかる機械ばかりだったけれど、だんだん安直に使える機械がふえてきて、やりやすくなってきてるから。

津野　そういう気軽に操作できるような機械がでてきたのはいつごろからですか。

橋本　軽印刷はガリ版からはじまったといっていい。戦後すぐ印刷の需要があったんだけど、印刷機は空襲でこわされちゃったり、ガタガタのものしかないもので、それでガリ版がものすごく発達したんですね。鉄筆とヤスリだけで仕事する筆耕屋というのが、職業として成りたっていた。だけどガリ版の欠点というのはなんといっても数が刷れないってことなんです。これをなんとかしてたくさん刷れないかと、いろいろなこころみが行なわれました。ガリ版をきったものを、オフセットにつかうジンク版にインクで印刷して化学処理するとそのまま印刷できるわけですね。それまで数百枚、うまい人でせいぜい二千枚刷るのが限度だったものが、この方法でやると一挙に何万枚と刷れるようになったんです。

次に和文タイプと結びついて、タイプオフというのがでてきた。65年から70年ころは相当多かったんじゃないかと思います。そのほかに60年ごろかな、紙に直接タイプ打ちしたものをそのまま版にしてオフセット印刷する方法もはやりましたね。そして70年ごろからゼロックスの原理を使った製版機が爆発的に使われるようになったわけです。これはやはり紙の版で、方法としてはかなり前からあって、けっこう使われてはいたんですけど、そのころ比較的安い機械が出まわりだしたんで普及したんじゃないかと思いますね。

新井　今はほとんどその方法でしょう。

津野　それにつれて印刷物のスタイルもかわってきたような気がするけど。手書きの部分や新聞の切り抜きなんかも自由に組みあわせて手軽にできるわけでしょう。

青山　手軽になってだれでもできるっていう側面と、機械の精度がよくなっているから、やっているうちにこりだすという側面もあるんですよね。こりだすとまた別の問題がでてくる。つくる方が専門化しちゃうってことも問題だけど、つくられたビラならビラをうけとる側にも問題がでてくるんです。以前はガリ版刷りのビラをうけとって、きれいなビラだなと思っていた人たちが、今ではもうガリ版でわら半紙に刷ったビラなんかうけとらない。大学では特にそうらしいですよ、まず紙が白くないとダメなんだって。一度オフセット印刷にしちゃうと、ガリ版刷りにもどれないらしいんですよ。そうなるとあとはどんどんエスカレートして、自分たちではつくらず全部印刷屋にたのむっていうことになる。だから、大学はかえって外注率が高くなってるんじゃないかなあ。

津野　それは逆流だなあ。

青山　逆流ですね。こりだすってことをぼくらのグループでいうと、自分たちで編集や印刷などをやっているうちに技術を身につけて、印刷関係の仕事につく人が多くなってきてる。模索舎で運動関係の印刷屋の一覧表をつくったことがあったけど、印刷屋だけじゃなくて、写植屋とかタイプやってるひとも含めるとけっこうたくさんいる。ただそれぞれの印刷屋同士はおたがいによく知らないらしいんですけどね。

橋本　同業組合をつくって、ノウハウを交流したほうがいいと思うんだけど……

津野　価格の差はかなりあるんですか。

新井　かなりあるよね。

青山　印刷の形体によってもちがうし、使う機械の種類によって、ものすごくひらきがでてきちゃう。

橋本　十数年ぐらい前は小型の機械がまだ普及していなかったから、どの印刷所でも、同じ印刷方式なら値段は大幅にはかわらなかったようです。今は部数やページ数が少ないものは軽オフのほうが安くできるが、多量になると、やはり大型機の方が安い。

津野　自分の運動体で印刷をやろうとした場合、どういうふうにしたらいちばん安くできるんですか。

橋本　もちろんガリ版がいちばん安いですよね。ガリ版というと、ひどくきたないものという感じがあるけれど、きれいにできたガリ版には写植やタイプの印刷物にはまったくない深い味わいがあって、実にいいものなんですよね。だれでも個人でもてる程度の設備投資ですむわけですしね。

津野　メディアプレスの基本である自分のものは自分で印刷するというのは、どういうかんがえかたからきているんですか。

橋本　ひとつには、印刷を発注する側と受ける側に分業するのはよくないということがあります。便宜的にわけるのは別にかまわないんだけども、印刷のやり方を知らないで発注するのは非常にムダな点が多いんですね。それをひきうける側だって運動体側の方針をわからずにひきうけていると思わぬ校正ミスをしたりする。そういうことはおたがいに知りあうことによって解決できるわけでしょう。使いこなすのに何年もかかる機械では、自分でやるべきだとはちょ

つといえないけれど、実際には比較的短期間で覚えられるものなので、だったら一度はやってみないかと呼びかけたいわけです。もうひとつには、どういうふうにして印刷物ができあがるのかわかっていると、いろいろ応用がきくし表現技術がゆたかになる可能性もありますね。

青山　運動をやってると、印刷だけでなく、すごく広範囲の技術的なことも必要になってくるんですよね。たとえばデモのときにスピーカーをどう扱うかとか、機関紙を発送するときどうするかとか。技術的なことをとりもどす、というか奪いかえしていくことが現実に必要になってくるはずなんだけど、それが大部分専門の人にまかされてしまっているってことがある。

津野　たとえばロンドンの空家のっとり運動なんかだと、そのうちの一軒にシルクスクリーンのような簡単な機械がおいてあって、壁には機械の使い方を書いた指示書をはって、だれでもそこへ行って印刷できるようになっているらしい。そういう印刷センターみたいな共同の施設があるといいなと思うんだけど……。メディアプレスはそういうやりかたに近いんでしょう。

橋本　そうですね。ただ、今のところ印刷機が借りものだから、やたらに変な使い方をされると困るんです。理想としては、だれでも使える安直な印刷機が一台おもてのほうにあって、奥の方には、もうちょっと高度なものができる機械がある、というのがいいんですよね。安直なほうで腕をみがいて、自信がついたら奥のほうまで来てもらう。

津野　いいねえ。

新井　ただ、機械があってもなかなか利用しないよね。運動やってるひとにも原稿さえ書いていればそれでいいって感じがあるみたい。

橋本　書くひとだけ多くてね。

新井　自分の体をよごすのはイヤだという。だから印刷機をつかえばどんなことができるかわかってない。

橋本　だけどわからないのは当然なんですよね。運動をはじめるのは大学生が多いけど、そういうひとたちってのは、学校でならうことと、テレビなんかのマスコミで知らされること以外知る機会がないんだから。学校では、15世紀にグーテンベルクが活版術を発明したことぐらいしかならわないわけだから、印刷ってのはどうやってやるかなんて、まったく知らないでおとなになっちゃう人がほとんどでしょう。

青山　ぼくらもお客さんに印刷技術をおしえるってことはないけども、つきあっていくなかで、最低限発注のしかたや印刷工程の説明をしないと、結局こちらの負担になってくる。やってみるとすごくおもしろいのにね。それまではどうやって本ができるかなんてわからなかったわけですよね。それが、自分たちで印刷して製本して仕上げる過程をやってみると、すごくおもしろいんですよ。

橋本　文部省が印刷のやり方を国民に知らせたくないんじゃないのかな。たとえば小学校の社会科でおしえてもいいし、国語でおしえてもいいし、図画工作でもいいと思うんだけど、全くおしえないんですからね。

津野　ぼくらが小学生のころは、ガリ版で学級新聞をつくったりしたけど、このごろはどうなのかな。

青山　先生たちはファックスが中心みたいですよ。

新井　自分の学級通信を出したくてタイプを買ってやってる先生もいるんですけど、それは子どもがやるわけじゃないから。

橋本　ガリ版みたいなかんたんな装置じゃなくて機械を使ってやるようになると、だんだん子どもの手から遠ざかりますよね。先生によっては使わせるだろうけど、使わせない先生のほうが多いんじゃないですかね。

新井　大学の自治会には輪転機があるものってきまってたけど、そういうものもなくなってきてる。早稲田はないってきいたし、日大でも謄写版と輪転機のあるところにはいろんなことやる学生が集まってくるっていうんで、学校が捨てちゃったんだ。

津野　一貫してだんだん遠くなっていく側面もあるわけだ。

三人　そうです。

津野　ぜんぶ印刷屋さんに発注しちゃう。

橋本　そう、専門化しちゃうということね。

津野　そういうことについてトライプリントはどう思いますか？当然矛盾としてかかえざるをえないと思うんだけど。

青山　もちろんどんどん仕事がくるにこしたことはないんだけども……。自分たちで印刷するっていうふうになったとしても、やはり限度があって、自分たちでできないものもたくさんあるから、そんなにぼくらと矛盾することじゃないですよ。基本的には運動の拡大は印刷屋にとってもプラスになるわけだから。

津野　「メディアプレス共同コミュニケ」みたいに、印刷屋と発注する人たちとの関係をきちんとするためと、同時に印刷の技術そのものを公開していくような手引きを運動関係者にわたしていく。そういう方法も必要かもしれないなあ。

橋本　なにかやったほうがいいという感じはしますよね。

青山　軽印刷のしくみや編集のしかた、あるいは発注のしかたについてのわかりやすいパンフレットをつくれば、経営戦略上からも有利になるし、教育的な効果があるから仕事そのものもやりやすくなるでしょうね。

　ぼくらはメシを食うために印刷屋をやってるわけだけど、運動とメシを食うことを両立させたいという前提があるんです。最初は6時ごろ仕事をおえて、そのあと三階の事務所で自分の運動をやるつもりだったのに、残業続きでなかなかそう思い通りにいかないんです。一時は12時ごろまで残業があった。そういうときに、運動関係で無理な注文がくることあるわけですよ。運動関係者のほうが印刷のたのみかたが荒っぽいというか、印刷屋のことをかんがえてくれない。印刷屋にたのんで待ってれば、すぐに印刷物がでてくるって感じがあるみたいなんですね。たしかにだいぶ機械化されているとはいえ、まだ手仕事、手作業が中心なんですよ。そういうことをぜんぜんかんがえてくれない。金さえ出せばってのがどこかで見えてくると、いくら運動関係者でもぼくらはあまりこころよく思わないですね。

　印刷やってて思うのは、できあがった印刷物はひとつの生産物で、ほかの工業製品や農産物と同じなんですよね。つくる過程の中には機械化されてる部分もかなりあるけど、それでもやっぱりぼくらが

労働してできた結果が印刷物だ。だからトライプリントをはじめてからは、ほかの製品でもそれがつくられる過程での労働者の存在がみえてきた。そういう問題も、運動やってる人たちにはとくにわかってほしいという気がするんですよね。ただたのんで待ってれば、印刷物がポコッとできてくるっていうことじゃなく……。

津野　単に印刷の知識がないってことだけでもない気がするね。きょうきいてはじめてわかったんだけど、印刷の技術を奪いかえす可能性があるにもかかわらず、むしろそれを奪われてしまう側面のほうが強いんだね。奪いかえすためのポイントはどこにあるのかな。

橋本　それは印刷という工程が、世の中の一般の人にとってはブラックボックスになってるからでしょうね。ここに印刷屋というブラックボックスがあって、その中に原稿をいれると印刷物が仕上がってでてくる。コピーの機械だって完全なブラックボックスで、中身を全然知らなくても、ボタンの操作さえわかっていれば使えるというものですね。そろばんはオープンだけど、電卓は完全なブラックボックスでしょう。世の中にそういうブラックボックスがひじょうにふえている。テレビが普及しだしたのは60年ごろで、そのころ生まれた人が今ちょうど大学生ぐらいでしょう。彼らはテレビなんてものは生まれたときからあるから、なんのふしぎも感じないんですね。ブラックボックスをふしぎに思わない。だから印刷屋をブラックボックスとしてうけいれてしまう傾向が強いんじゃないですか？

津野　そうすると印刷屋さんに対する運動体の乱暴な接し方というのは、たんに論理的なものというよりも……

橋本　世の中の構造的なものでしょうね。

新井　ぼくは大きい印刷屋につとめたことがあるんだけど、プリンティングディレクターというのがいて、原稿がきてからできあがるまで管理している。どこの部門に何日ごろ原稿がいって、という一覧表をつくる。ひとりひとりの労働者は、その表にしたがって仕事をするシステムになっているから、自分が何をやっているか実はわからないで、まわってきたものだけをただこなしている。

橋本　印刷屋にかぎらず、なんでもそうですね。自動車つくる工場もそうだし、原発なんかそれの最たるものじゃないですか。運動体もその風潮にそまっちゃうわけでしょうねえ、どうしても。

津野　うーん、なるほど。

橋本　これを打破するためにも、印刷を一度は自分でやってみてください。

メディアプレス市民工房　橋本誠也
（メディアプレスは、現在のところ通常の印刷業務の受注は行なっていません）

㈱トライプリントショップ　青山　正
東京都文京区向丘1－3－7　☎03－814－3780

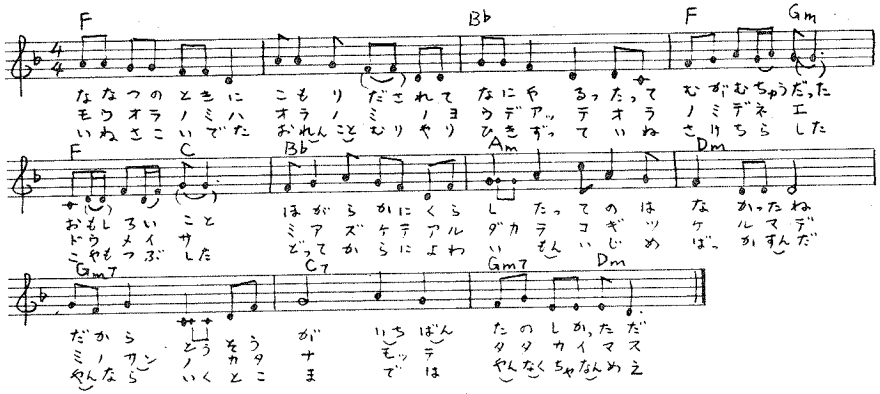
軽気球舎　新井弘泰
東京都新宿区高田馬場2－7－11　コーポ高田306　日本AA作家会議内　☎03－205－2794

水牛編集委員会　津野海太郎

よねの宣言

ことば　大木よね
曲　高橋悠治

1971年、三里塚。電灯もない2坪の小屋に住む65才の大木よねは機動隊におそわれ、小屋をこわされ、わずかなもちものすべてをとりあげられた。
親をしらず、学校にもゆけなかったよねは闘争宣言を仲間に筆記してもらった。



七つのときに子守りだされて
何やるったってむがむちゅうだった
おもしろいこと
ほがらかにくらしたってのはなかったね
だから闘争が一番たのしかっただ

もうおらの身はおらの身のようであって
おらの身でねえ
同盟さ身あずけてあるだから
こぎつけるまで
みのさんのかたなもってたたかいます

いねさこいでたおれんこと
むりやりひきずって
いねさけちらした
小屋もつぶした
どってからによわいもんいじめばっかすん
だ
やんならいくとこまではやんなくちゃなん
めえ

第三世界の農民にこたえて

安里　清信

「金武湾ＣＴＳを見ずして、ＣＴＳは語れない」と語った客がありました。米系ガルフ社や、和系三菱らが金武湾を狙って侵入したのは、復帰混乱の前後からであります。猛反対のなか、いまでも巨大ＣＴＳ建設の鎚音は果てるところを知りません。清らかな白砂の海、海底の花畑のようなサンゴの海を無惨にも生き埋めにしてしまいました。

旧歴三月三日は、「浜降り（ハマフリー）」といって、女が海に降りて、貝をあさりつつ身を浄めるのですが、泥濘の海、油の海では身を浄めることもできず、優しい海、女の海は奪われてしまいました。ガルフ社を両手をあげて歓迎した島の学校ＰＴＡは、十年たったいま、「海を返せ、さもなくんばプールを」と村当局に訴えています。海の子が海を追われて泳げなくなったからです。子どもまで蝕まれていきます。

金武湾は、沖縄屈指の好漁場でした。いまでは魚もサッパリです。金武湾の総水揚高の六割以上はモズクが占めました。五四年四月、モズクの最盛期に、重油と毒性の中和剤ガムレンがタレ流されて全滅いたしました。魚も、甲いかも死に、サンゴも、ホンダワラも消えました。生態系の毒殺は、痛ましい限りでした。

その事故から六年たち、ようやく戻り、漁民はモズク養殖を手始めました。それが順調にのび希望が湧きました。その矢先、ペトペトの廃油ボールの大群が襲って、一瞬にしてまたまた殺し去ったのです。どこまで海を殺し、漁民を傷めつければすむことでしょうか。死生の間で迷って打ち沈んでいます。

金武湾は、豊かな漁場でもあれば、絶景の海で内外の客も呼びました。海上公園に指定もされました。石油基地にするため一片の告示で解除しました。絶景の海をたよりに生きる遊魚船組合、港町会の諸団体、住民も損害賠償を叩きつけています。みんなの海を奪った怒りです。

「揺り籠から墓場まで」とは、これら企業や為政者の声でした。村財政は三年連続県下唯一の赤字団体に転落し、累積起債も十一億に達し火の車です。村有地まで企業に奪われかねない情況です。幻の揺り籠の島は、巨大ＣＴＳタンクの前代未聞の大事故で「恐怖の島」に一変し騒然としています。島々は痛々しく侵食され防潮林は崩れ落ちていきます。米軍原潜からは放射能がタレ流され、世の最果てが見えてきた感じです。

人類の生存の危機を脅すすべてが、金武湾に集中しています。根こそぎの破壊と汚染は恐怖です。日本の怪力は、琉球弧の島々を伝って南下するでしょう。島は海に囲まれた平和と永遠なる生存を求める人の別荘です。なにものもこれに優る価値はないと信ずる。「人間の生存」について、ペドロさん、インドのサビトリーさん、パラオのウルドンさんとも「水牛通信」を通して語りたいものです。

第三世界の農民にこたえて

平野　雄三

第三世界の人民が自分たちの食料を確保し、石油やその他の資源を自分たちが使う分だけ生産し、日本に送らなくなるのは良いことだ。それは日本人民に食料や資源を通して、苦闘している第三世界人民を、いやでも想い起こさせるであろう。石油にどっぷりと漬かっている生活を自覚することから、新たな生き方、人民の団結のあり方、社会のありようまで考えさせることにもなるだろう。

日本に「農民と漁民はいない」と言ったら言い過ぎなのだろうが、日本の農地と海は既に工場になってしまっている。工業化された農・漁業の下で働いているのは、生態系を忘れた農業労働者、漁師とは異なる漁業労働者が大部分と言ってもよかろう。都市の工場労働者すら全就労人口に対する割合は低下の一方だ。反対に、第三次産業に従事する労働者が増え続けている。

新幹線に乗り、高速道路を走り、クーラーを使うのを前提とした生活。生きていくための必需品は何一つ生産しない多数の都市労働者。化学肥料を大量に投入し、農薬を広範囲に散布した農作物を生産する農民。現代テクノロジーで重装備した船で世界の海を荒しまわる漁民。これらの食料を食べる都市労働者の現実をどう変革するのか？

私たちが闘いにたちあがるとき、その闘いは必然的にその生活、労働、生産のありようが問われてくる。闘いがこれらと無関係のものであれば、それは闘いではなく趣味と呼ぶしかないだろう。闘いだけが先鋭的であっても、生活、労働、生産のありようが支配構造にべったりであれば、その闘いが長期化すればここから崩れていくのは当然である。

闘いまでも石油漬けにしてしまう、社会制度化し、巨大で、生態系を無視した現代テクノロジーの延長上に、私たちの未来はないと思う。とりわけ分業の極限とも言える、人間の思考力さえ合理化し、無力にするブラックボックス化の進行しているテクノロジーの未来は、これを支配している権力者に権力がますます集中し、中央集権の強権の下に管理された生き方だけが待っていると思う。

現代テクノロジーを実践的に批判するには、闘う人民が自分自身の手で新たな世界観をもって自然と共存する技術態系を創り出すことであり、便利で快適な石油漬けの生活から肉体的な苦痛を伴っても脱け出し、第三世界では当り前のことと思うが、自然と共存する生活を創り出すことが問われてくる。

エネルギーと資源を浪費する大量生産・大量消費・中央集権型の世界に別れを告げる新たな社会運動をつくるには、都市労働者も、農・漁民も、互いの闘争、生活、労働、生産のありようを第三世界の人民を視野に入れて批判しあい、社会のありよう、団結のありようを考えるなかから始まり、新しい人民の団結が組織できるのではないか。今こそ、その時代が到来していると思う。農・漁民が都市の労働者とは無縁のところで、自分たちだけの生活、生産を、そして闘争を変え、人民の大義をうちたてることはできない。

第三世界の農民にこたえて

横山　好夫

三里塚とは地続きの地型も良く似た柏市のはずれに最近引越をした。タラの木があったりウドが自生していたり、谷地の田んぼには芹が群生していたりして何となくのびやかな気になる。チマチマした分譲住宅の密集地のあい間に宏大な農家が点在する。トマトのハウス栽培をしている農家のおやじさんに「少し分けてくれませんか」と頼んだら、「出盛りになったらいくらでも売るけど、いまは売る方が気の毒になるほど高いからまたにしなよ」と断わられた。

労働者と農民の関係がこのように牧歌的で直接的であったら、ペドロの問題提起にも大いにうなづけるところだ。しかし問題の本質は労働者と農・漁民の関係にあるのではなく、そのような関係をつくり出している社会の機構にあるはずだ。われわれの世代でも親子二代の労働者は少ない。三代ともなるとこれは稀だ。血肉の関係をさえ、階級的に分断してきた日本の資本主義の機構である。第三世界の農民と漁民が日本に食糧を送らない、インドネシア人民が日本に石油を売らない、といったらイランのとった態度が素晴らしいようにそれは素晴らしいことだと思う。いまでも第三世界の人民は好意から日本に食糧や資源を売っているわけではない。売らざるを得ないから売っているのだという国際的な資本主義の関係から問題を整理するべきだと思う。

ペドロの来日中に討論ができなかったのは残念だが、ペドロの日本の労働者への問題提起はあまりに類型的すぎると思うのだ。社会編成の原理として農を基本とする自力更生の社会を考えるのならこれは一つの社会モデルたり得ると思うのだが、運動や階級闘争の問題として「農本主義」が語られると、タラの芽を採ったり、芹を摘んで農業にかかわったような気分になるのと同様のチグハグさを覚える。生活のあり方や意識の変革から社会変革へという道すじが、最近の社会運動や労働運動自体の停滞を反映してよく語られる。ペドロの提起もややこれに近い。しかし、この回路は結局のところ新たな社会編成の原理を産むとは思えないのである。アジアの「第三世界」の農民と日本の労働者の、打ち建てるべき関係は、そのそれぞれの立場や関係を強制している共通の敵を認識し合うことであり、その闘いに勝利するための共同の戦線をつくり出すことにあるのではないか。

ペドロがたんに農民ではなく、農民運動の活動家であるだけに彼の問題提起が皮相であることは残念だし、それは迎えたわれわれの責任でもあると思う。ペドロに三池闘争を知ってもらうべきであった。農民の子がなぜ土から離され労働者になっていったのかの自己体験を理解してもらうべきであった。アジアの農民と日本の労働者の共通の土台について語り合うべきであった。水牛通信のペドロの文章を読み返して改めてそう思うのである。

海は人の母である

——金武湾のたたかい

津野海太郎

よく晴れあがった三月十八日の昼さがり、私は金武湾にのぞむ屋慶名の干潟にすわっていた。正面に緑の平安座島。そのひらべったい島の右側に四基、左側に四基、薄緑色に塗られた出光石油の備蓄タンクがならんでいる。いわずと知れた金武湾CTS（石油備蓄基地）の眺めである。ここにすわった私の眼からは見えないが、平安座島のむこうに宮城島があり、その間の六十四万坪の広大な埋立地には、三菱石油を中心とする二十一基のタンクが据えられているはずだ。

左手に眼をやると、屋慶名と平安座島とをつなぐ三・五キロの海中道路が、泥でつくった巨大な海蛇のようなすがたを横たえている。この道路のために潮の流れがせきとめられ、屋慶名の海は息もたえだえの状態においこまれてしまった。

でも、海の生命はまだ完全に失なわれたわけではない。同行の井上澄夫（自主講座）が、さきほどから干潟の石をどけては、砂や砂利を掘りおこし、わずかに残された生命の痕跡をもとめつづけている。かれは大分県の中津に生まれ、九州電力の火力発電所建設計画によって破壊された周防灘でそだった。そのことを知って、「なるほど」と思った。干潟をさぐるかれの手つきは綿密で、堂に入っている。ときおり、ちいさな半透明の小エビやカニの子、ヤドカリなどがみつかる。かれはうれしそうにつぶやく。

——ここの海だってまだ生きかえるかもしれませんよ。可能性はありますね。

その昔、海はわれわれの金蔵だったと、昨日の夜おそく、泡盛のコップをかたむけながら、安里清信さんが語っていた。新聞などでは、いつも「金武湾を守る会」の「代表世話人」と書かれるが、安里さん自身は「世話人のひとり」とだけ名のって、この「代表」ということばをみとめようとしない。右にせよ左にせよ、ピラミッド型の組織のかたちは、われわれの生活や文化にはしっくりこない。あえてそれを受けいれてしまったら、われわれの運動のいちばん大切なものがくずれてしまうだろう、とかれはいう。運動は株式会社ではない。生活や文化の自立と、それをささえる住民たちの水平の結びつきだけが、金武湾の運動に未来をたぐりよせる力になる。

金蔵というのは銀行のことである。三菱ではなく、金武湾の人々にとっては、海こそが銀行だった。沖縄の漁業はその九〇パーセントが沿岸漁業で、二人のりのクリ舟をあやつって沖あいの珊瑚礁にこぎよせ、そこにあつまった魚貝類を採集する。その珊瑚礁も、CTSの埋立工事や流出した石油によって、見

るも無残に破壊されてしまった。

屋慶名の人たちも、海、とりわけ干潟をかれらの生活の中心においてきたようだ。干潟にはおびただしい生命がつまっていた。そこに立って、かかとでグリグリやると、たくさんのクルマエビがわきだしてきた。まるで砂地の下に、おびただしいクルマエビの層があるようだった。そしていま、綿密な探索のはてに、ようやく顕微鏡で見るにふさわしいほどの小エビをつまみあげて、井上澄夫は「まだ可能性はある」とつぶやくのだが、本当に、この干潟がかつての盛大な生命力をとりもどすことがありうるのだろうか。「大丈夫かね」ときくと、かれは「そう思いますよ、あの海中道路さえなんとかしてしまえばね」とこたえた。

真夏のような青空を背景に、平安座島の石油タンクがギラリと光る。いまにもゴジラかラドンが出現してきそうな、不吉な光景である。こちらにやってくる前に、私は『思想の科学』一九七九年十二月号に掲載された、安里清信さんへのインタヴューを読んだ。つぎの一節がとくに印象にのこった。

――石油基地がくる前は、海はここ（安里さんの家）から三百メートルぐらいしかないわけですから、私も夕飯を食べてから、すぐ電燈ひとつもって出かけよった。暗いなかで人の声があっちこっちで聞こえるわけでしょ。那覇のことばが聞こえるし、沖縄市のことばが聞こえるし、内間（うちま）、平安名（へんな）のことばが聞こえるし、いたるところから来ていることがよくわかりますね。そしてそこでまあ交流がおこなわれる。どこからいらっしゃったのかというようなことでね。人生のなかにいろんな寂しさがある。その寂しさを晴らしにくるとか、あるいは楽しみにやってくる。若い人たちが、いまはデイトと言うのかな、そんなものの関係できている者もおりまするし。だから海というものは、すべての人を育てる大きな役割をもっているなあということが、そこでよくわかりましたね。人の母ですね、海は。

暗闇の干潟に、さまざまな土地のなまりをもった人々の声がひびきあい、そこで人間たちのしっかりした関係がかたちづくられる。真昼間の石油基地の人間ばなれした光景にくらべてみるとき、この、さまざまな土地からやってきた人々が呼びかわす声にみたされた暗闇は、夢のように充実した、じつに魅力的なものとして感じられる。

そして、この暗闇の干潟にかたちづくられた人間たちの関係は、海が土地と土地とをひきはなすだけではなく、昔から、それらを近づけ、かたく結びつける役割をもはたしてきたということを、ものがたっている。海のインターナショナリズムとでもいうべきものがある。宮城島のさらに向う側にある伊計島や、屋慶名のとなりの照間の漁民たちは、ちっぽけなクリ舟で、沖永良部、ついにはマラッカ海峡にまででかけていった。かれらはウミアッチャー（海を歩く人）と呼ばれた。そういう人々の共同体が、ここにはたしかに存在していたのだ。

照間をはじめとする金武湾の漁民たちが、反CTS闘争に積極的にくわわってきた。これが最近の「金武湾を守る会」のたたかいに生じた、ひとつの大きな変化であるらしい。

六日前の三月十二日、二二万トン級のタンカー十和田丸がシーバースに着桟し、はじめてのオイル入れを強行した。これに対し、沿岸漁民をはじめとする「守る会」の七十人が、陸上デモに呼応して、十二隻の船にのりくみ、海上集会をひらいた。小雨にけむる金武湾に、「海殺し、漁民殺しの油入れを許すな」というシュプレヒコールがひびいた。金武湾はもちろん、沖縄でもはじめての海上集会だった。

第二回目のオイル入れは、四月のなかばに予定されている。ちょうどハマウリーの日にあたりそうですと安里さんがいう。ハマウリーはすなわち「浜下り」――旧歴の三月三日、女たちが浜におりて、海に半身をひたし、からだとこころの穢れをきよめる行事である。だが穢れをきよめるというのは口実で（「よごれてるのは男の方でしょう」）、実際には、女と母親、そして漁民を主人公とする年に一度の祭りであったらしい。屋慶名でも、以前は三千人をこえる人々がこの干潟にあつまり、貝や小魚、その他の磯でとれたものを小鍋で煮たて、泡盛をくみかわしながら、カチャーシーに興じ、あわせて、海で亡くなった人々の魂をとむらった。

そのハマウリーの日にオイル入れをしようというのである。そのことが、支配者たちの沖縄についての無知無識ぶりを、あからさまに示している。「守る会」の人々は、できればこの行事を復活して、「海殺し、漁民殺しの油入れ」に対抗したいという。そこできよめられることになるのは、こんどこそ女ではなく、CTSが沖縄の海にもたらした穢れであるだろう。

ハマウリーによって、あるいは、おばあさんたちが打ちならすハーリー鉦や、大城フミさんがつくったかずかずの即興の闘争歌によって、オイル入れを阻止し、近い将来、CTSを撤去させることができるか。できないかもしれない。できないだろう。では、できなければ、たたかいは敗北なのか。そうではない。「ヤマトの人たちは負けるために運動をしているようだ」という恐るべきことばを聞いた。「守る会」の人々は、時間はわれわれの味方である、その時間のなかでわれわれは勝ちつつあると感じている。たたかいの勝利と敗北とをはかる別の基準を、かれらはゆっくりとつくりだしつつある。

自分たちの土地の文化的イニシアティヴを手ばなしてはならないというのが、かれらの運動の一貫した方針だった。

金武湾の海や干潟と、そこでの労働にむすびついた文化（ハマウリーから闘争歌にいたる）が、沿岸住民の自立した生活を内側から組織していく。銭金（ジンガネ）の文化による包囲をはねのけて、そのことがどれほど大切であるかという理解が、すべての住民によってわかちもたれたとき、たたかいは勝利する。そして、住民たちの生活と文化の自立に失敗すれば、たとえCTSを撤去させたところで、たたかいは敗北なのである。その基準によって見るならば、十年前、五年前、いや、一年前にくらべてさえも、住民の意識は大きく変化した。誘致派の暴力は影をひそめ、屋慶名区と照間区とをあわせた与那城村の村長でさえ、しぶしぶながらも、CTSによる自然破壊をみとめざるをえなくなった。

いりーあばぐぁたや
ばんじゅぬめーんじほーはっぱてぃ
ぐしぐぁさにちーくじれ
たっちけーもてぃ

昨年の七月、屋慶名の大綱引きでよみがえったこの「喧嘩歌」の詞にも、三菱がまきちらす銭金のまぼろしに対抗して、集団の生命を産みだす者の自信が反映しているようだ。これをヤマトことばに飜訳すると、西（の組）の女たちは、役場の前でおめこおっぴろげ、小枝でつっつきゃ、起っておどったよ、という意味になる。女は海。そして海はまさしく「人の母」なのである。

〈朝鮮語〉の学び方 V

身のまわりのものから

李銀子（イ ウンジャ）

名詞を覚える

も少し、名詞を覚えることにしよう。まず身のまわりのものから。

もし、いま電車にゆられながら、これを読んでいるのなら、「電車」は「전차」〔tʃɔ:ntʃha〕座りながら読んでいるなら、「椅子」は「의자」〔ŭidʒa〕、「座ぶとん」は「방석」〔paŋsʌk〕むかっているものは？「책상（机）」〔tʃhæks'aŋ〕「밥상（食卓）」〔papsaŋ〕。この「상」という語はもともとは「床」という意味で、「食卓や机・涼み台などの総称」（韓日辞典）である。よって、机は「本の床」と解釈することから「책상」、食卓は「飯の床」ということで「밥상」である。

また、いま読んでいるものは？「잡지（雑誌）」〔tʃapt'i〕、くわえているものは？「담배（たばこ）」〔ta:mbæ〕、これに関連し「성냥（マッチ）」〔sʌŋnjaŋ〕に「재떨이（灰皿）」〔tʃhæt'ali〕。

〈朝鮮語〉の場合、받침（終声）の語の次に初声が「ㅇ」や「ㅎ」の語がきた場合、そちらに移項する。つまり、フランス語流に言えば、リエゾンする。

他に例をあげれば「전화（電話）」がそうだ。「전화」は一つ一つ読むと〔tʃɔ:nhwa〕だが、正式に発音すると〔tʃɔ:n wa〕になる。

次に、卓の上に、なにか飲みものはありますか？　たとえば「우유（牛乳）」〔uju〕、「차（お茶）」〔tʃha〕、「홍차（紅茶）」〔hoŋ tʃha〕、「커피（コーヒー）」〔khophi〕、これは韓国的英語発音とでもいおうか。

また「차」に関連していうと、〈朝鮮語〉は漢字の音読みをしたものが非常に多い。本号に出てきているものでも「의자」「잡지」「전화」「우유」などはその例である。ということは、漢字音の読み方を習得すれば、語彙はぐんと増えるということだが、日本語で、「茶」の字を「ちゃ」と読む場合、〈朝鮮語〉は「차」だし、これを「さ」と読む場合は、「다」〔ta〕とよむ。

たとえば「喫茶店」。韓国では普通「다방」〔tabaŋ〕「茶房」という。この「방（房）」は部屋のことを指すが、これとあわせ「本屋」を「책방」〔tʃhækp'aŋ〕という。

飲みものの話に戻ろう。

「おさけ」は「술」〔sul〕だが、ビールは、「麦酒」を読んで「맥주」〔mækt'ʃu〕、「焼酒」は「소주」〔sodʒu〕、〈朝鮮〉のお酒「どぶろく」は「막걸리」〔makkʌlli〕である。

「소리」から

この連載を読みつつ、単語は声に出して読んでいますか？「声」は〈朝鮮語〉で「소리」〔sori〕と言います。

「소리」は「声」のほかに「うた」という意味があります。「うた」にはほかに「노래」〔nɔrɛ〕という語もありますが、これはニュアンスが少しちがいます。

「노래」は、昔でいうなら貴族階級のたのしんだ時調や歌曲、現在でいうなら、西欧的な五線譜にのっている歌曲を主に指します。しかし「소리」といった場合、「아리랑」〔ariraŋ〕や「토라지」〔toradʒi〕に代表されるような庶民にひろく親しまれているうたをいい、その代表的なものとして「판소리」〔phansori〕があります。「판소리」の「판」は、「場」という意味です。つまり「人々が広く集まる場」という意味ですが、そこで歌われるうたが「판소리」です。

「판소리」は、「탈춤（仮面劇）」〔thal tʃhum〕とあわせ、韓国の代表的な民族芸能の一つですが、その内容は、非常にユーモラスで文学的、快活な語りうたです。また、人間の感情ばかりでなく、鳥の啼く声や水の流れる音、雷の音など自然界にあるさまざまな音も、人間の声で表現するというダイナミックなものです（「판소리」は、日本の「義太夫」と並び称されると聞きます）。

また民族芸能の代表ともいえる「탈춤」は語源的にいえば「탈」は「面」のこと。「춤」は「おどり」で、普通「仮面舞踊劇」といわれます。

「탈춤」は18世紀頃に成立したといわれますが、その時代の文献はほとんど残っていないといわれます。それは、文献記録を担当した層が「탈춤」には、ほとんど関心を示さなかったためで、よって「탈춤」は、国家的な行事とは別途に存在した、民衆的伝承であると考えられています。

その後の研究で、「탈춤」の起源は、①それが「무당（巫堂）」〔mudaŋ〕の一行事」から始まったという説（金在喆）と、「建国神話」であるという説（崔南善）、またどの「탈춤」にも共通してあらわれる「四方神の舞」や性的表現から察して、「탈춤」が豊魚豊農を祈る祭儀とする説などありますが、どちらにしても、かつては祭儀としておこなわれていた「탈춤」が、しだいに劇的なものに転換していったことは確かです。

ここに2つの伝説があります。

「ある年の大洪水のこと。草溪に大きな木櫃一つがたどりついた。村人たちはこれを引きあげ開けてみると、中に仮面があふれていた。当時、草溪には各種の伝染病や災害があいついでいた……。ところが仮面をかぶり演戯をしたところ、不思議と災害がなくなったという」（崔学壽「野遊・五広大仮面劇の内容意義とその形成」）。

「いまから約百年前、草溪に말뚝이〔maltʃuki〕という馬夫がすんでいた……。村では両班（貴族）の力が強く民草は虐げられていた。これに怒った말뚝이が、両班の内情を知り、その醜行を村人千余名をあつめたその席で暴露したが、素顔ではあとでひどい目にあうので、仮面をかぶるようになったという」（芮庸海「人間文化財」）。

前者の伝説では、人間と自然の葛藤を解決しようとする場合、呪術的な力をもつものとして仮面をかぶったが、後者では、人間と人間の葛藤を表現する場合、自分自身の隠れみのとして仮面を使ったというのが、この伝説の言謂であろうが、実際は「両班と말뚝이という、この両者の典型をより明確にし、말뚝이ではない者も、その仮面さえかぶれば、だれでも『말뚝이』になれるというのが、本当のところではないか」（趙東一「仮面劇の美学」）。この説に、私も賛成です。

かつて両班階級は、豊農祭としておこなっていた一切の儀式を「溌祀」として排撃しようとしたが、そこには、これらの儀式を通して持続する農民たちの、共同体的組織が、両

班の支配秩序をおびやかすということから、その共同体的組織を解体させようとする企みがあった。ところが、農事を円滑に推し進めるためにもこのような部落祭は、たやすく解体されはしなかった。

また「탈춤」は、一種の演劇的裁判でもあったともいう。つまり、これらの儀式は、自然との葛藤を呪術的に解決し、生活の安全を得るために挙行される行事であるため、生活の安全を得るには、共同体の秩序維持を保たせなければならない。よって、大規模な祭を挙行するこの機会に、共同体の秩序を破る者に対する裁判がおこなわれたという。しかも、それはどこまでも喜劇的に。

「소리」の話から、いつの間にか「판소리」や「탈춤」のことになってしまった。誌面も尽きたようなので、いつものようにこの号に出てきた単語を復習することにしよう。

전차、의자、방석、책상、밥상、잡지、담배、성냥、채덜이、전화、우유、차、홍차、커피、술、맥주、소주、막걸리、소리、노래、판소리、아리랑、도라지、탈춤、말뚝이

●読み方・意味は本文を探してください。

●「탈춤」に関する記述はおもに、趙東一著「韓国仮面劇の美学」を参考にしました。

編集後記

5号に特集したフィリピン農民のスライド「もうたくさんだ」は、五月二十四日東京での上映会につづいて、六月二十六日大阪での上映会がきまりました。同時にハワイでの反核会議報告と、ウラン採掘に反対するナバホ族のたたかい、フィリピンやタイの歌を予定しています。

東京では、七月五日(土)に「フィリピン・バナナと私たち」と題した討論集会があります。フィリピン・バナナ農園の労働者は労働条件改善と組合結成を要求してたちあがっています。この集会はフィリピン労働者をさく取しながら、農薬づけのバナナを大量生産する多国籍企業のたくらみに反対するキャンペーンのきっかけとなるもので、「水牛」も参加しています。

この6号に特集した人民の印刷術については近いうちに一冊全部をつかって、実践のためのマニュアルを発行します。体制のたくらむメディア統制に抵抗するために印刷技術とスタイルを自分の手でつかんでおこう。

五号の訂正。スライド番号9の1万2千円は12万円、17の3万3千円は3万6千円のまちがいです。　(U)

購読の御案内

＊本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

申し込みと送金は郵便振替（口座名水牛編集委員会、口座番号東京四―九一七九二）または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

＊購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信　第二巻第六号
一九八〇年六月十日発行
定価　二〇〇円
発行人　堀田正彦
発行所　水牛編集委員会
〒154 東京都世田谷区新町2―15―3　八巻方
電話〇三（四二五）九六五八
振替口座東京四―九一七九二
印刷所　㈱トライプリントショップ